途中下車

ホモ・ルーデンスⅡ

貞松　光男
Mitsuo Sadamatsu

佐賀県果樹試験場長を最後に県を退職してはや１５年になる。退職後は病害虫分野からは離れようと思っていたが、まったく縁を切ることはできないでいるのはやむを得ないことかもしれない。なぜ離れようと思ったか、それはほかにやりたいことがいっぱいあったからだ。このたび、「途中下車」への原稿依頼があり、現役時代にもこの欄に書いたことがあったので調べてみたら３３年前（１９７８年）に「ホモ・ルーデンス」というタイトルで書いていた。そこで書いている遊びの世界（趣味と書いているが）が、その後の私の生活のなかで、どのように発展ないし変化して定着しているかを「ホモ・ルーデンス Ⅱ」として記すことにした。たとえば、ここ１カ月間に、地元の小城商工会議所の幹部相手に「小城市の振興について考える」というタイトルでの講演、佐賀大学文理教育学部から、唐津焼の若手窯元相手に「唐津の郷土料理」についての講演依頼をこなした。なんだか、内容がちぐはぐなところがホモ・ルーデンスたるところと思うのだが。

現役時代、畑作地帯の試験場に場長として勤務したことがあった。米作中心の日本農業の時代、そこは佐賀県のチベットと称されていた。この畑作地帯を通じてこれからの日本農業がどうあるべきかを考えた。私なりの考えは、たまたま農業技術協会が「日本農業の未来像」についての懸賞論文を募集していたのでこれにまとめて応募した。どういうわけか３席に入賞した。国の方針とはかなり異なる意見を書いていたのでこれには少々驚いた。日本農業は中山間地農業であることは地形からみると異論がないだろう。それを将来に向けどう生かすか、という趣旨だった。当時の農政は農民の所得をサラリーマン並みに高めて農村を維持するとともに、消費者に安定的に安全、安心な農産物を提供すると云われていた時代であった。ただ当り前のことだが、農産物（食糧）は食べ物である、という基本的な視点が欠けているようにも思えた。総括的に食糧としてとらえるか料理された食べ物としてとらえるかである。食べ物から農業を見直すと新しい切り口が見つかるのではないかと思ったのである。そこで、日本人の食べ物について勉強を始めた。食材（農作物など）は実に豊富だ。それに対し大規模化、小品目化は日本国民を裏切ることになるのではないか。佐賀に帰って佐賀のいわゆる郷土食についても当然勉強し、実地に足を運んで食べさせてもらったりした。話は少し外れるが、帰佐した年、某画家宅で卓を囲んでいるとき、偶然にもある町長と同席し、東北地方の山菜の話になった。あなたの地区にも材料はいっぱいありますよ、と言ったら、じゃ俺の地区でやってくれということになり、山菜料理の会を催すことになった。初めは年一回の催しだったのがだんだんに発展し、今ではそのための建物が新設され、常時、食を提供するまでになっている。農村集落の婦人たちが経営しており、中山間地帯の活性化の一つとして全国的な話題となった。私は月一回、そこで卓話を提供することになっている。その間、平成１３年には「佐賀の隠れ味」（佐賀新聞社刊）を出した。これは農文協の各県の食のシリーズの佐賀県版に記載されていない料理を中心にまとめたものである。それによって、大学や新聞社が開催する食のシンポジウムのパネラーとして招かれたり、公民館や各種団体から呼ばれることが多くなった。自分で料理を作ることもなかった素人として恥ずかしい気もするが、そこは農から食物を考えているのだと自分に納得させている。

また、退職後直ちに温州ミカン園を借りた。当時はやりの高品質ミカン作りを私なりの方法でやってみたかったからである。私の管理園で生産されたミカンはおばあちゃん達からはこんなにおいしいミカンを食べるのは生まれて初めてなどと褒められた。できるだけ自然に近い無理のない技術を目指していたが、より上の安定した技術を目指そうとすると限界があり、自分としてはなかなか満足できるところまではいかなかった。多年生作物のむつかしさを痛感したものである。今でも糖度の高いミカンが高品質だとする風潮があるが、私はむしろ糖酸比が重要でこれを１０以上にするという方向でやっていた。これも１２年間続けたが園主の問題もあり、当方も時間的、体力的な問題があってやめざるを得なかった。自己満足だけで終わったのはやはり残念な思いがする。それでも、ミカン農家とは縁が切れず、ミカンの新品種についても相談をうけることがあり、将来性の判断を求められる。これにも食を考えてきたことが役に立っていると思う。話題の品種が２種あり、将来の動向に期待している。

農業とは直接関係がないことについて触れる。ある時、先輩から佐賀県は樹木医の数が全国最低だ、なんとかしろ、との指令がきた。なんとかしろと言われてもそうそううまくいくものでもない。仕方ないので自分で樹木医の試験を受けることにした。内容もまったくわからないまま受けてみたら合格してしまった。樹木医の仕事はそんなにあるわけないが、かって従事した病害虫の仕事が役に立つことはあまりないし臨終間際の樹木の樹勢回復という農業場面では考えられなかった作業に戸惑いを覚えることがある。とはいえ、環境悪化と自然界の植物の生き方について考えるきっかけを与えてくれた。

趣味のライフワークとしてきた野生植物の調査では、相変わらず山野を駆け巡っている。地方フロラの調査は勿論だが、人と植物との関係にも関心がある。前回の「途中下車」で触れた「佐賀の植物方言と民俗」の増補改訂版を平成１９年に出版した。これには植物方言のみでなくそれらの植物を佐賀県人がどのように考え、利用したかを示すもので、もうこの手の本は世の中の趨勢からして最後になると思う。蛇足ながら、中心になってまとめた者として骨董的価値がでる本に間違いないと思っている。この本の内容を解説した記事を佐賀新聞紙上で３年間毎週一回のペースで書いた。その一部をまとめて今年（平成２３年）佐賀新聞社から「方言で味わう佐賀の植物」として出版した。これに先立つ平成１１年にも同社から「ふるさと植物誌」を出版している。これらは画家による植物絵がついていて楽しい読み物になっていて案外評判がよかった。

これらの文章を書くには多くの文献、資料に目を通さねばならない。私は大学時代から神田の古書店に通っていた。今でも東京行は古書店めぐりが欠かせない。学生の頃は仕送りなしで貧乏だったが、にもかかわらず貴重な古書を安く買えたものである。それらが今になって役に立っている。原著でなく復刻版でもよいのだがそれもなかなか手に入らない時代になって歯がゆい思いをしている。そんななかで、佐賀の本草学史的なものを明らかにし、いくつかの論文にした。植物を愛した佐賀の殿様や偉人たちや本県生まれの本草学者、銘木、古木、特産果樹などについてである。これから書きたいものとして、とりあえずは、ハゼノキと蝋、コウゾと和紙、タバコと煙草がある。これまで集めた資料を整理してみたらそれぞれ２００点以上あった。論文にするのが大変だと怖気づいているところである。

えらく堅い話になったが、かっては考えなかった遊びもある。その一つに渓流釣りがある。狙うのはヤマメ。ある時、ある著名陶芸家の家で某銀行頭取、某大手建設会社社長夫妻それに某大学学長らを相手に山菜料理を造ったことがあった。その時、某大学学長が渓流釣りにぞっこんなのを知った。そこで弟子入りを志願した。もう１０年も前のことだ。その時は普段は見られない渓流沿いの岸壁に生える植物を見ることができるという思いがあった。そんなよこしまな考えがあったからかなかなか釣りは上達しなかったが最近になっていくらか師匠に近づいたような気がする。

いわゆる文化人と称される人との交流も相変わらず続いている。佐賀には通称人間国宝と呼ばれる人が４人いる。陶芸３人と染色（型摺）１人である。いずれとも付き合いがあるが人間国宝になる以前からの付き合いである。念のため。その外、画家、書家、文筆家、クラシック音楽演奏家兼管弦楽団代表等々。いずれも、見たい、聞きたい、知りたい、と自分がやりたいことをやってきたなかでの人脈で

ある。それに一般人。女性が多いので羨ましがられるが、女性の人口が多いのだから当然だということにしている。

広く浅くを願っているわけではないが、広くを求めれば浅くならざるを得ないのは仕方がない。全てを趣味と割り切って生きているからにはそれで十分ではないか。昂揚した趣味から生まれた概括的な新しい知見に対して肉付けしてくれる後輩が出てくるならそれに越したことはない。とはいえ、以前にもまして多忙になったような気がする。いつも何かにせかれているような気分だ。ゆっくり遠出もできない。自分で仕事を作り出してそのような雰囲気に追い込んでいるのだから何をか況やである。断っておくが、人には苦しいとか逃げ出したいと言っているけれども、それは口先だけのことで、本当は自分がやりたいことをしているのだから何の不満もない。好きなことを好きなだけやっているのだから、いい暮らしをしていると言えるのではないか。それがホモ・ルーデンスたるゆえんである。

あらかると

オペラへの誘い

昨年3月までの5年間をニューヨークで暮らし、見つけた楽しみのひとつが本場のオペラでした。内容が難解、時間が長い、値段が高いといったイメージもあって、二の足を踏まれる方々もいらっしゃると思いますが（音楽ファンを自称する私もそうでした）、食わず嫌いで終わってしまうのは勿体無い話です。

NYのメトロポリタン歌劇場（通称"MET"（メト））は、ミラノスカラ座、パリオペラ座やウィーン国立歌劇場などならび世界三大（あるいは五大）歌劇場のひとつといわれます。ステージの規模と豪華さは世界一との評価もあります。シーズンは9月末から翌年の5月半ばまで。日曜といくつかの祝日を除くほぼ毎日、週7公演（土曜は午後と夜の二公演）上演しています。一シーズンの演目数は約30ですから、週一ペースで通えば全演目を制覇出来る計算になります。

「歌劇」の和訳通り、主役はソリストといわれる歌唱陣（典型的なのはソプラノとテノールのカップルに、彼・彼女の友人、色恋相手や恋・政敵だったりする）ですが、それに合唱が加わり、作品によってはステージの上は総勢200名を超えます。衣装、大道具、小道具の数々に、舞台下のピットにはフルオーケストラ。オペラの魅力は、聴いて楽しみ観て楽しみ、正に五感で楽しむ魅惑の時空間といえます。

気軽にオペラを楽しむには料金が手軽であることも大きな要素です。上記でお分かりのようにオペラ上演には莫大なコストがかかりますが、メトでは最上階のファミリーサークルですと$25-40程度です。これはミリオンドル単位で寄付をするユダヤ系をはじめとするパトロン達の存在が無縁ではないでしょう。因みに日本公演のため2011年6月にメトが東京に来ていましたが、最廉価のチケット（席数が限られており入手困難と思います）が一万円を超えていました。

初心者の方でも楽しめると思われるものを三つ挙げてみました。DVDもたくさん出ていると思います。興味が湧きましたら徐々に「ドロドロ」したものに挑戦されれば如何でしょうか。

◇カルメン

自由奔放で移り気なカルメンと未熟なマザコンドン・ホセのコントラスト。音楽も舞台もスペイン情緒満点ですが、作曲家のビゼーはフランス人で実は生涯に一度もピレネーを越えたことがなかったそうです。有名なオペラだけあってご存知の曲も多いはず。出来はカルメン（メゾソプラノかアルト）の力量次第だが、もうひとり主役を挙げるならドン・ホセではなく「闘牛士」でしょう。

◇**ラ・ボエーム**

悲哀オペラの決定版のひとつ。韓流ドラマにも通じるこの手のストーリーは日本人にも受けるように思います。ミミ（ソプラノ）とロドルフォ（テノール）の歌曲はソロ・デュエットとも甘美極まりなく痺れること請合いでしょう。結核に侵されたミミはロドルフォに看取られて亡くなり幕。個人的意見ですがミミ役は歌の実力に加えて容姿も重要な要素です。

◇**ラ・トラビアータ（椿姫）**

パリの高級娼婦（ヴィオレッタ）とマジメ青年（アルフレード）のこれまた悲哀オペラ。日本で言えば江戸時代の人気花魁と彼女に一途な名商家の跡取り息子との成就しない恋物語といった感じでしょうか。アルフレードの父親に息子との仲を諌められ別れを決意するヴィオレッタの心理描写等、内面性にも富んだ作品です。ヴィオレッタの死因もやはり結核。当時は死の病の代名詞だったんですね。

オペラが少し身近に感じられれば幸いです。次回海外旅行の楽しみのひとつにオペラ鑑賞を加えてみては如何でしょうか。

I ♡ NY

編　集　後　記

◆日本の活気を一気に吹き飛ばした昨年3月の大震災と原発事故から1年が経とうとしています。直接的、間接的に影響を受けられた方々には心よりお見舞いを申し上げます。
農業関連では津波による農地の被害に加え、農産物の一部に暫定基準値を超えた放射能が検出されるなどの影響を及ぼしています。1年を経てようやく基準値の設定が行われるようです。

◆経済面でも超円高、ＴＰＰ問題や消費増税懸念など多くの不安定、不確定要素があり、将来の不安を感じざるを得ない状況です。

◆現在登録されている農薬に関し、適正使用下での残留農薬に起因した健康被害は考えられないにも拘わらず、残留農薬が心配だから少し高くても有機農産物を購入するという声を耳にします。
慣行防除で農薬を使用した農産物と有機農産物の間に栄養素や他成分の差がないという英国からの報告（過去の論文3,000以上からの比較）が出ています。

◆復興に向かって歩み始めた日本の農業に、弊社農薬が少しでもお役立ていただけることを切望いたします。

（波多野）

事業分野　アグリビジネス、機能性化学品事業、医療品事業、環境化学品事業、クロールアルカリ事業

Noyaku jidai
農薬時代
Agchem Age

（禁転載）
第193号

発行日　平成24年３月１日
編集発行人　波多野　連平
発行所　**日本曹達株式会社**
東京都千代田区大手町２－２－１
編集部　☎(03)3245-6178

NIPPON SODA CO.,LTD.
SHIN-OHTEMACHI BUILDING,
2-1, 2-CHOME, OHTEMACHI
CHIYODAKU,TOKYO, 100-8165, JAPAN

ホームページ　http://www.nippon-soda.co.jp/nougyo/

本社	〒100-8165	東京都千代田区大手町2－2－1	☎(03)3245-6178
大阪支店	〒541-0043	大阪市中央区高麗橋3－4－10	☎(06)6229-7343
札幌営業所	〒060-0061	札幌市中央区南一条西6－15－1	☎(011)241-5581
仙台営業所	〒980-0021	仙台市青葉区中央4－10－3	☎(022)227-1741
信越営業所	〒949-2302	新潟県上越市中郷区藤沢950	☎(0255)81-2323
東京営業所	〒103-0022	東京都中央区日本橋室町4－6－2	☎(03)3279-6961
名古屋営業所	〒460-0008	名古屋市中区栄3－1－1	☎(052)238-0003
松山営業所	〒790-0005	愛媛県松山市花園町3－21	☎(089)931-7315
福岡営業所	〒810-0001	福岡市中央区天神2－14－13	☎(092)771-1336
二本木工場	〒949-2392	新潟県上越市中郷区藤沢950	☎(0255)81-2300
高岡工場	〒933-8507	富山県高岡市向野本町300	☎(0766)26-0206
小田原研究所	〒250-0216	神奈川県小田原市高田345	☎(0465)42-3511
榛原フィールドリサーチセンター	〒421-0412	静岡県牧之原市坂部62－1	☎(0548)29-0611
磐梯フィールドリサーチステーション	〒969-3302	福島県耶麻郡磐梯町大字更科字比丘尼山3967	☎(0242)73-2525